

宗祖親鸞聖人御誕生八百五十年・立教開宗八百年慶讃法要
大阪教区お待ち受け大会 記念講演録

よろこびて、ほめたてまつる

慶讃法要をお迎えするにあたって

一楽真

刊行にあたって

大阪教務所長 禿 信敬

「ありとあらゆる人に届くように」

さる二〇二二年十月二十九日、前日までの五日間の難波別院報恩講をお勤めさせていただいた後、今春お迎えいたしますご本山真宗本廟東本願寺での宗祖親鸞聖人御誕生八百五十年・立教開宗八百年慶讃法要に向けて、大阪教区のお待ち受け大会を開催させていただきました。この大会には、大谷暢裕門首、木越涉宗務総長をお迎えし、大谷大学の一楽真学長に記念講演をお願いいたしました。参加者は難波別院と、サテライト会場の天満別院・茨木別院・八尾別院大信寺・大和大谷別院・堺支院、あわせて三百名のご参加をいただきました。慶讃法要準備委員会をはじめとする多くのスタッフの方々にご苦勞をいただき厚く御礼申しあげます。

このお待ち受け大会は、本山での慶讃法要のお待ち受けであるとともに、大阪教区の慶讃法要の出発の大会でもありました。記念講演で一楽先生には、「親鸞聖人は、法然上人が開かれた浄土真宗がありとあらゆる人に届くようにと、ご苦勞なされた」と教えていただきました。お念仏の流れをいただいております私たちも、共々に、この宗祖の生涯かけての仏道を共に歩んでまいりたいと思います。

また本書の表題は、親鸞聖人がご和讃「慶喜奉讃せしむべし」の左訓にお示しいただいた「よろこびてほめたてまつるべしとなり」から、教区発行のリーフレットとともに『よろこびて、ほめたてまつる』といたしましたことを申し添えます。

最後に出版を快諾いただき校正の労をおとりくださった一楽先生と、この記念講演録作成にご尽力いただいたスタッフの皆さんに、心から御礼申しあげます。

合 掌

目次

刊行にあたって	大阪教務所長 禿信敬	2
聖人の夢告	7
浄土がほんとうのよりどころ	11
生き方に大きな変化が訪れる	15
真宗を教えてくださいくださった人	20
立教開宗の歴史的経緯	26
悪人だからこそ	30
顕浄土真宗	34
称名は聞名	37
生きてはたらく念仏	41
ともどもに念仏申す	44
私にとっての親鸞聖人	51
あとがき	慶讃法要準備委員会委員長 山雄竜磨	57

聖人の夢告

ようこそお参りくださいました。私は石川県の小松というところに生まれまして、大谷大学に四十六年前に入学しました。学生たちには大学は卒業するところだと言っていますが、私はいまだに大学にいて、学生さんと一緒に親鸞聖人のみ教えを学んでおります。いろいろな問題を頂戴しながら、親鸞聖人にならずねていこうという場をもらっていることは、大変ありがたいと思っております。

今回は大阪教区の宗祖親鸞聖人御誕生八百五十年・立教開宗八百年りつきょうかいしゅう慶讃きょうさん

法要のお待ち受け大会ということでもあります。お待ち受けというのは、来年ご本山でお勤まりになる慶讃法要を、我々ほどのようにお迎えするのかということとを確かめさせていただく会であります。もちろん私がその心構えというか、答えを持っておるわけではありません。私、一楽はこんなふうを受けとめております、こんなふうにお待ちしたいと思えますという意見を申し上げさせていただくということ、みなさんにはそれを材料にしてお考えいただければありがたいと思っております。しかし私自身、親鸞聖人の御誕生ということを日頃どう考えているかといったら、あまり毎日そのことに思いを致しているとはとても言えないです。

例えば親鸞聖人は大事な人生の転機には「夢告^{むこく}」といって、聖徳太子のお言葉^{ことば}を夢の告げとして聞いておられます。十九歳の時の磯長^{しなが}の御廟^{ごびやう}での伝説的な夢告もあります。二十九歳の時、比叡山を下りて法然上人のところに行く前の夢告がいちばん有名ですね。

みなさんどうでしょうか。私が大学に入ってその話を初めて聞いた時には、「夢の告げなんて、そんないかげんな」って思っていました。なぜかというところ、自分自身はばたつと寝て、まったく夢を見ることもなく朝起きるような生活をしてきたからです。しかしそんな私でも、気になることがあると夢にまで見るといふことはやはりあります。ということは、親鸞聖人が人生の転機であれだけ夢をご覧になったということは、よほど考え抜き、あるいは追い詰められていて、夢にまで見るといふ状況だったと思います。かつて松原祐善^{まつばらゆうぜん}先生が、「親鸞聖人は六角堂^{ろっかくどう}に籠^こもっておられた時、ぬくぬくと寝ておったんじゃないぞ。親鸞聖人はずっと寝られなかったんや」とおっしゃった。私はその時に初めて、この夢告ということの重さを知らされた気がいたしました。

そう知らされたのでありますが、私はまだ親鸞聖人が夢に出てきて語ってくださったということはないんです。みなさんは出てこられたことはありますか。夢に聖徳太子が出てきて明確な言葉をおっしゃるといふことは、よほど聖徳太

子のものを読んでおられ、あるいはご生涯に思いを致しておられるということがあるわけです。その意味で言うと、私は追い詰められるのもいいかげんかもしれませんが、親鸞聖人のことをどれほど思っているのかと問われると、「ずっと考えています」なんてとても言えないというものを持っています。

ですから私のことを基準にするのではなく、親鸞聖人が出遇あわれた方々をどのように慶讃なさったか。あるいは仰いでいかれたのか。その親鸞聖人が先人の御誕生をどう受けとめておられたかを、今日の話の基準に置きたいと思っております。

浄土がほんとうのよりどころ

親鸞聖人にとっては法然上人との出会いが決定的でありました。しかし今申し上げたとおり、法然上人にお会いになるには聖徳太子の励ましがないと行くわけにいかなかったのです。

聖徳太子は在家の信者さんです。それまで親鸞聖人は比叡山で出家の修行者でありました。出家の修行を二十年してきたわけでありますから、それを捨てるというのは簡単なことではありません。ほんとうに捨てていいのかというぎ

りぎりのところで、聖徳太子の生き方に学ばれた。在家の信者にも道はある、仏道は成り立つのだということ。聖徳太子からただかかれて、ようやく法然上人のもとに行くわけです。比叡山から直接、法然上人のところに行つたのではないのです。これは気をつけておかなければならないところだと思います。

みなさんどうでしょうか。今でも仏教というと出家の修行者が中心というように思われていませんか。お釈迦さまはたしかに出家をし、修行もなさいました。でもそれはひとつの道なのです。お釈迦さまは在家の信者さんにも教えを説いておられますし、また男も女も関係なしに仏法を説いておられます。それにもかかわらず、いつのまにか仏教が男の出家の修行者に限定されていくということが起こるのです。

したがって親鸞聖人が比叡山を下りられる時は、これがほんとうにお釈迦さまの教えようとしておられたことなのだろうか、仏教ってなんなのだろうかという問いを持っておられたと思います。そして在家の信者であった聖徳太

子に励まされるかたちで、ようやく比叡山の修行に決別して、そして法然上人のところに入門なされた。すごいご決断だったと思います。

親鸞聖人が遺しておられる和讃わさんには、法然上人のことを書かれたものが多いつもあります。ひとつあげますと、

智慧光ちえこうのちからより

本師源空ほんじあらわれて

浄土真宗をひらきつつ

選択本願せんじやくのべたまう

(聖典・四九八頁)

とおっしゃいます。「智慧光のちから」、つまり阿弥陀仏の智慧の光のはたらきの中から、「本師源空あらわれて」、法然上人は私たちのところ、この世に来てくださったということです。そしてそのあと「浄土真宗をひらきつつ 選択本

願のべたまう」とおっしゃいます。浄土真宗を開かれたのは法然上人だということ、はつきりおっしゃっています。そして阿弥陀仏の本願、苦しみ悩む者をひとり残らず救いたい、あるいは傷つけあうありかたを超えさせたいという「選択本願」を説いてくださったのが法然上人であります、はつきり言っておられます。したがって「浄土真宗」は法然上人によって開かれたんです。ただこの「宗」^{むね}は今の宗派とか教団という意味ではありません。人間のほんとうのよりどころという意味です。「むね」というのは、^{やまとことば}大和言葉ではものごとの中心をあらわすのだそうです。体で言えば胸。建物も必ず棟を上げないといいけません。漢字は違いますが、それがないと成り立たないというものが「むね」です。この「宗」は生きていくよりどころなのです。なにを大事に生きるのかということ、法然上人は浄土が真宗ですよということをおっしゃってくださった。浄土がほんとうのよりどころですよということをおっしゃってくださった。そう親鸞聖人はおっしゃっているわけです。

生き方に大きな変化が訪れる

今は宗教ということも、いろいろな形で問題になっております。でも「宗」がない人はいないですよ。こだわっていることがひとつもないという人はいない。無宗教の人も、「私は無宗教だ」ということを「宗」にしておられるわけです。だから宗教と無関係だと思っておられるかもしれませんが、必ずなにかを「宗」として生きておられる。

現代は「自分は無宗教だ」という人がほんとうに多いです。しかし例えば

教育の世界でも、学生を育てるのにまるで製品を作るかのように、目に見える結果を出しなさいと言われる。成果主義ですね。そのために手間をなるべくかけずに効率的にということにもなります。今の世の中は全部、成果主義・効率主義という宗教に覆われているのではないか。こういうことを思います。

さらに言うと、役に立つか立たないかという考え方です。若い人でも年寄りでもそう考えていますよね。人間のいちばん根っ子の考え方もかもしれません。だから教祖はいないのですが、みんな「役に立つ立たない教」の信者かもしれません。金が第一だというのであれば、拝金教の信者ですよ。どこに教祖がいるのだと言われそうですが、別に教えの経典とか教祖がいなくても、その「宗」にがんじがらめになっているということがあるわけです。

その「宗」が「真宗」なのかということ、親鸞聖人は問うてくださっているのです。「真」というのは「変わらない」という意味です。例えば若い時には通じたけれども、年を取ったら成り立たなくなったというのは、真宗ではあ

りません。体が元気な時にはよりどころだったけれども、病気になってしまったりもう当てにならないというのも、真宗ではありません。どんな状況、年齢になっても変わることのないもの、浄土が真宗ですと教えてくださったのが、法然上人だというふうにおっしゃっているわけです。

ですから親鸞聖人は、「真」に対して「仮」と「偽」ということをおっしゃいます。「仮」は仮のもの、一時的という意味です。若い時には当てになつたけれど、年いったらダメになったというのは、これ仮のものです。「偽」は偽物です。それをよりどころにしたら逆に自分が苦しみ、人を傷つける。だから真宗が頭かになるというところには、かならず仮と偽がはつきりするということが同時なのです。

その意味で真宗を学ぶということは、心地よいとは言えないかもしれません。「ああ、今日の話はおもしろかった」というわけにいかないと思います。なぜなら自分の日頃大事に思っていることが、ほんとうかということ問われるわ

けですから。そしてほんとうを教えられたら、今までほんとうだと思っていたことが、そうではなかったということが暴かれるわけです。心地よいとは言えないと思います。しかしそこに、「ああ、これが大事なことだったんだ」「ここに私の生きる道があったんだ」ということがはつきりすれば、「真宗に出遇えてよかった」「教えていただいたてよかった」ということが言えるわけです。

親鸞聖人は法然上人を通して真宗を教えられた方だという、ここが大事なのです。浄土真宗、これは「浄土が真宗です」という言葉です。「浄土こそ真宗」と言ってもいいと思います。ただ最近、この浄土ということが会話に出てくることはなかなかないですね。少し前の真宗門徒なら、「お浄土に還かえらせてもらいます」とか、「私もそのうち参りますから」とおっしゃっていました。最近よく聞くのは、「安らかにお眠りください」という言葉です。まだ眠らなければいけないのですかね。

人生を尽くされた。もう病気で苦しむこともなければ、人間関係で悩むこともない、静かな世界に還られた。こういうみんなが還る世界としての浄土。このようにも親鸞聖人は言われます。

もうひとつ大事なものは、浄土が明確になることによって、今の生き方に大きな変化が訪れるということであります。役に立つか立たないかということを基準に生きていけば、役に立ってあるあいだは威張るんですね。でも役に立たないとなったら、自分に価値がないというように落ちこんでいく。それで苦しんでいるのではないのでしょうか。しかし阿弥陀の世界は、役に立つ立たないということを超えた世界なのです。そんな人間の物差しでは決められない世界なのです。そこに触れたところに、がんじがらめになっていたことからの解放が起る。これを親鸞聖人は教えてくださったと思います。

真宗を教えてくださいました人

その意味で法然上人が浄土真宗を開かれたことによつて、私たちがどう生きていくかがはっきりしたということをおつしやるのです。ご和讃にもあります。

曠劫多生のあいだにも

出離の強縁しらざりき

本師源空いませずは

このたびむなしくすぎなまし

(聖典・四九八頁)

長い長い迷いを重ねてきたけれども、その迷いを超える縁に遇うことがなかったというのです。そして法然上人がおいでにならなかつたならば、今回の人生もむなしく終わってしまうところだった。迷いを重ねるだけで終わるところだった。ある意味で感謝を込めながら、自分の歩んできた愚かさをうたつておられるご和讃だと思います。法然上人のおかげでむなしく過ぎる人生を超えることができたという感謝、喜び、それに遇わなかつたら迷いを重ねるだけだったということです。

阿弥陀という言葉はインドの「アマタ」という古い言葉がもとです。これを漢字に当てて「阿弥陀」と表しているわけでありませぬ。音写語といつて、いわば当て字ですので、この漢字をいくら調べても意味はわかりませぬ。ですから

親鸞聖人はそれを翻訳した言葉で、「正信偈」^{しょうしんげ}でいえば「無量寿如来」^{むりょうじゅめにょらい}といちばん始めでうたってくださいました。分量で量れないのちです。人間の物差しではけっして量ることのできないのち。これを「無量寿」というわけです。長い短いということ関係ないのです。

実際どうでしょうか。日頃は勝ったか負けたか、損か得かと、全部量っていますよね。一本のお花を見ても高いか安いかな。全部量っています。そして最後には自分の存在をも量っていく。それに対して「けっして量れない世界があるぞ、これを大事にしなさい」と法然上人に教えられた。そして法然上人を生み出した背景が七高僧^{しちこうそう}です。龍樹菩薩^{りゅうじゅぼさつ}までさかのぼって、さらにその根っ子には、お釈迦さまがそれを教えてくれていた。親鸞聖人はこれに出遇ったんです。それを真宗、ほんとうの宗だと仰がれたのです。

なぜなら人間の価値観は時代時代でコロコロ変わるでしょう。今の日本は経済効率が最優先かもしれません。しかしわずか八十年前は大日本帝国でした。

その体制の中では、なにが大事だったでしょうか。今のように経済的利益だけを中心にしている人がいたなら、たぶん恥知らずと批判されることもあったでしょうね。そしてまた、国が違えば価値観は違います。我々はそういう人間の価値観で右往左往しているわけでありませう。そんな中でほんとうに大切なことはなんなのか。これが「阿弥陀に出遇え、無量寿といういのちに出遇え」という呼びかけだったわけでありませう。

これは親鸞聖人にとっては驚きだったと思います。比叡山では修行を完成して覚りを開いていくという仏道を歩んでおられたわけですね。ところが男性の出家の修行者が中心であって、女性は排除されていました。あるいは修行ができない体の人も排除されていました。文字が読めないような人はお経を読めませんので、そういう人は比叡山に登ることすらできなかったでしょう。親鸞聖人はたまたま男で体も元気で文字も読めたわけですね。しかしお釈迦さまはそんな狭い世界を教えたのではないだろうということをおぼろげにたずねる中で、「阿弥陀に出

「見え」とお勧めくださる釈尊しゃくそんに改めて出遇い、そのお言葉をいただくことになるわけですね。

お釈迦さまは「行け」と言う人です。「私のところに来い」とはおっしゃらない。七高僧もみんなそうです。「わしが助けてやるから、わしのところに来い」なんて言った人はひとりもいません。だいたい「わしのところに来い」というのは怪しいのです。「わしのところに来い、金持ってきて来い」と言われたら行かないほうがいいです。そうではなくて、ひとりひとりを独立者として生み出す。これがほんとうの宗教だと思います。子分をつくったり、部下やら手下をたくわえていこうというのは、結局そのトップの人が甘い汁を吸うための教団です。親鸞聖人はそんなものはひとつも残しておられない。家屋敷を残してくださったわけじゃない。財産を残してくださったわけでもない。「阿弥陀に出遇え」という教えにみずからも出遇われ、そしてそれを私たちに伝えてくださったという事です。

その意味で親鸞聖人が法然上人を仰いだのと同じように、私たちは「親鸞聖人のおかげで真宗を知ることができました。ほんとうに大切なことを教えていただきました」と言えるかどうか。これがなければ親鸞聖人を宗祖と呼びするわけにはいかないと思うのです。親鸞聖人は法然上人を「真宗興隆の大祖源くわうぼん空法師」と言われています。「真宗興隆の大祖」、この宗と祖を取り出していただければ「宗祖しゅうそ」です。親鸞聖人は法然上人を宗祖と仰いで生きられたかたであります。それは私に真宗を教えてくださいとくださったということがあるからなのです。私たちもまた、「親鸞聖人のおかげで真宗を知ることができました」ということがなければ、宗祖と呼びできないのです。ご本山がお決めたことという話じゃないのです。私が親鸞聖人をどういただいていくかという、ここに深く関わるのです。

立教開宗の歴史的経緯

「立教開宗」ということにも少し触れておきたいと思います。実は明治五（一八七二）年に浄土真宗と名告なつることが許されることになりました。安永三（二七七四）年から始まって江戸時代の終わりのほうの百年間、ずっと宗名論しゅうみょうろん争そうというのがあるんですね。東本願寺や西本願寺が江戸幕府に浄土真宗と名告らせてほしいと言っていますが、浄土宗が許さなかったんです。徳川幕府のお寺は上野の寛永寺と芝の増上寺ですが、寛永寺は天台宗、増上寺は浄土宗で

す。寛永寺は自分たちには関係ないので「どうぞご勝手に」という感じだったらしいです。ところが芝の増上寺は浄土真宗なんていわれたら、自分らは浄土宗で、真が入っていない。それでは偽物と思われるではないかと大反対で、百年間論争が続くのです。このあたりのことを詳しくお知りになりたいかたは、二〇〇八年の大谷派の安居あんごで木場明志先生あけしが、『宗名往復録』という宗派の名前についてやりとりした記録を取り上げてくださいました。『宗名往復録』註解しゆげ（東本願寺出版）という本になっていますので、詳しくお知りになりたいかたはご覧ください。

それまで他の宗派の人から真宗門徒は本願寺系なら本願寺門徒、あるいは一向宗いっこうしゅうといわれたりしておりました。浄土真宗という名を教団の名前、あるいは宗派の名前としては名告っていなかったのです。ところがやはり他から呼ばれる本願寺門徒とか一向宗ではなく、自らの名告ったものを宗派の名にしたというのが、江戸時代末期の『宗名往復録』に残されている記録なのです。

それで明治五年になって、ようやく真宗と名告ることが認められた。まあ少し浄土宗に遠慮して、十派がみんな、真宗〇〇派と名告るようになったのです。今、本願寺派だけは浄土真宗本願寺派といっておられますが、これは明治の初めのことではなくて、戦後（一九四六年・昭和二年）に真宗に浄土を付け足されて、今は浄土真宗本願寺派になっています。

その時に宗名は決まったけれど、いつ開かれたんだということが問題になりました。それで真宗十派が共同で見解を出した。立教開宗の日を『教行信証』^{きょうぎょうしんしよう}をお書きになっているその年と決めたのです。『教行信証』の「化身土卷」^{けしんじ}の中に出てきます「我が元仁元年」という年号です。西暦で言うると一二二四年です。まあこの「我が」というのもすごいですね。今は令和四年ですが、これを「我が令和四年」と言う人いますか。いませんよね。自分の生きていく時代としてきっちり書いておられる。これが「我が元仁元年」です。時代全体を引き受けているような、そういう響きすら感じます。

この年を記しておられるということから、この年に『教行信証』を書いておられたということは間違いない。これを基準にして一二二四年を立教開宗の年だと定められたわけであります。もう一度言いますが、定めたのは明治五年であります。そのあと五十年ごとに勤まって、今回の法要は三回目であります。これもいちおう歴史的事実としてご承知いただきたいと思えます。

悪人だからこそ

しかしこの立教開宗の歴史的経緯が私にとってどういうことなのかということを確かめませんと、なにか遠い話になります。しかも今の話で言いますと、親鸞聖人ご自身は浄土真宗を開いたとはおっしゃいません。浄土真宗を開かれたのは法然上人だとおっしゃいます。では立教開宗は関係ないのかというと、私はそうは思いません。

誰にとってもほんとうのよりどころ、ほんとうに大切なことを、法然上人が

教えてくださったのです。しかしそれがすぐに世の中から批判を受けることになりました。現代でもそうですが、やはり仏教は出家して修行するものだと思われていますから、念仏ひとつで誰もが迷いを超えられるというのは簡単すぎるという批判を受けるわけです。一生懸命修行している人たちから見ると、「仏教を舐めているのか」という話になったと思いますね。「南無阿弥陀仏」と声に出したぐらいで、なぜ救^{たす}かるのかという話です。

それゆえに親鸞聖人三十五歳の時（一二〇七年）に専修念仏^{せんじゆねんぶつ}は弾圧を受けました。法然上人以下八人が流罪、四人が死罪になりました。南無阿弥陀仏を喜んでいただけでなぜそこまでいくのか。よほど考えないといけないことだと思います。まあ当時の伝統仏教からすれば、今で言う新宗教みたいな感じで念仏宗が出てきたわけです。こんなものを認めたら仏教が滅びてしまうと、大真面目に弾圧したのです。

そしてもうひとつ弾圧する側が許せなかったことが、善人も悪人も助かると

言ったことです。これもどうでしょうか。浄土真宗をよく聞いておられる人中にも、「親鸞聖人の教えは好きだけれども、悪人が助かるというあれはどうかなあ」とおっしゃる人はけっこうおられます。「そんなことを言ったら、わざと悪いことをする人間が出てくるじゃないか。やっぱり仏教は基本的に悪いことはやめていいことをしましょうと、こうでなきゃならんはずだ」とおっしゃる。悪人が助かるという教えはなかなか受け取れないのです。

しかし親鸞聖人は、自分は愚かな悪人、愚悪ぐあくの衆生しゆじやうだという立場におられます。それは今から新しい悪事をやりましょうという造悪ぞうあくの勧めすすめではありません。そうではなく、気がついていないだけです。悪を造っていることに目を覚ませということなのです。

例えば親が子どもを育てる時には一生懸命ですよ。でも多くの場合、自分の思いに一生懸命なのです。子どもの存在をちゃんと認められるか、これが難しいんですね。例えば兄弟が二人いて上のお兄ちゃんがよくできたりすると、下

の弟はだいたい「なんでお兄ちゃんのようにできないの」って責められます。親は励ましてるつもりかもしれませんが、弟は暴れますよ。「お兄ちゃんのをいでぼくは怒られる」みたいなことになります。そうやっていいことをしてるつもりでお互いに苦しめ合っていく。これを親鸞聖人は「悪」というふうにお呼びになります。

それで大事なのは、悪人だからこそ教えによって導かれなさいといけません。悪人でもオツケーという意味ではないのです。悪を造っていることに気がつかないような悪人だからこそ、教えによって助けられないといけません。悪人成仏、悪人正機しやうきという教えであります。

顕浄土真宗

これは親鸞聖人が言い出したことではなくて、さかのぼればお釈迦さまの教えにいくつも出てまいります。ひとつの例を申し上げますと、子どもが七人いる親がいたという話があります。その七人の子どもはみんなかわいんだけども、その中に病気の子どもがひとりいたら、親はどうするかと言ったら、やはりまず病気の子どもに手を差し伸べる、いちばん目をかけますよね。如来もそうだと書いてあるんです。

如来は一切衆生をみんな救いたい。誰をも慈悲の心で見えておられるんだけど、罪を造って痛ましい生き方になっている悪人を先に救わないといけないわけです。もし傷つけあわないような人間がいたとすれば、後回しでもだいじょうぶですよ。痛ましいからこそ説法しないといけない、痛ましいからこそ手を差し伸べなきゃいけないんです。だから悪人成仏は親鸞聖人の専売特許のように言う人がありますが、もともとお釈迦さまの教えがそうなのです。

さらに言えば、この世が五濁悪世ごじよくあくせだからお釈迦さまは説法しないといえなかったのです。傷つけあわないような生き方ができていれば、お釈迦さまは説法しなくても大丈夫でした。放っておけなかったんですね。そのままいつまで生きるつもりだという、これがお釈迦さまの説法の根っ子にあると私は思います。

法然上人がせっかく誰もが阿弥陀に触れて、傷つけあったり苦しみあったりすることを超えていく道を開いてくださったのに、当時の伝統教団からは仏教

じゃないと言われる。そこに親鸞聖人が浄土真宗の意味をあらためて確かめられるというのがお仕事になるわけであります。「顕浄土真宗」です。法然上人が開かれた浄土真宗が壊されかかっている、見失われていく現状の中で、その意義、その大切さをあらためて顕かにしていくということが、宗祖のお仕事になったわけです。

その意味で法然上人は「開^{かい}」、親鸞聖人は「顕^{けん}」。お二人で浄土真宗を「開^{かい}顕^{けん}」してください。ですから、けっして法然上人おひとりで立教開宗ということが済んでいるという話にはならないと思います。法然上人の仏教がなかなか受け入れられにくい状況の中で、どうやったら伝わるのか、どう言えばこのお念仏の大切さが受けとめてもらえるのか。これが親鸞聖人のご苦勞だったと思います。

称名は聞名

親鸞聖人はどこまでも、法然上人が開かれた浄土真宗がありとあらゆる人に届くようにと、ご苦勞なされたわけです。親鸞聖人は二十年比叡山で修行しておられますから、批判する側の気持ちもよくわかりだったんですね。「南無阿弥陀仏と口に称えたぐらいでなぜ助かるのか、おかしいではないか」と修行している人は思われたはず。この気持ちがわかるから、念仏の意味を確かめていかれるわけです。でもこれは比叡山の人たちが批判するだけではないで

しょう。現代の我々も言ってますか。「ナンマンダブツと言ったぐらいでみんな助かるって、それは簡単すぎる。やっぱり山に籠もって修行しないと」って、言われるんじゃないですか。

そこで親鸞聖人はこの南無阿弥陀仏というのが「本願招喚の勅命」、如来が私たちを呼んでくださる絶対命令とまで押さえられました。私が「阿弥陀さんよろしく」と、こっちからお願いをするのではないのです。南無阿弥陀仏というのは、「阿弥陀仏に南無しなさい。阿弥陀の世界を大事に生きなさい。物差しで量れない無量寿といういのちを生きる者になりなさい」という如来からの呼び声だとおっしゃるわけです。ですから私が称えても、誰かに聞かせるためではないのです。私自身が「阿弥陀仏に南無せよ」という呼びかけをいただくということが大事なところなのです。

「勅命」というのはもともとは中国の皇帝の命令、王様の命令であります。親鸞聖人は実際、後鳥羽上皇や土御門天皇の命令で越後に流罪になったわけで

す。でも親鸞聖人がわざわざこんな言葉を使っておられるということは、ほんとうに聞かなければならないのは上皇や天皇の命令ではなくて、「阿弥陀の世界に南無せよ」という阿弥陀の呼び声だと。それを私はいちばん大事な呼びかけとしていただいていますというのが、「本願招喚の勅命」という言葉を使っておられるお心だと私は受けとめております。

法然上人以来、称名念仏は、「南無阿弥陀仏」と口に称えることですが、同時にそこに聞いていくのです。「称名」は「聞名」です。これを親鸞聖人は『教行信証』で丁寧じやべに押さえておられます。学生としゃべっているとおもしろいですね。「称名念仏で助かると言って誤解を受けるのなら、始めから聞名で助かると言ったらどうですか」と言われました。なるほどと思いますが、でも称名抜きに聞名できますかね。

昨日の晩、「明日は大阪や」と思って早く寝たら、早く目が覚めました。「こんな暗いうちから目覚めんでもええのに」と思いました。でも起きた時になに

を考えたかといったら、「何時からやったつけ」とか、「遅刻してないよな」ということでした。時間に縛られているんです。残念ながら南無阿弥陀仏が第一声にはならなかったです。南無阿弥陀仏と共に目が覚めればいいんですけど、残念ながら「今日何時からやったつけ」みたいなそんなものです。

でもそんな私でもご本尊に手をあわせて「南無阿弥陀仏」と称える時に、「ああ、そうやったなあ」と、いろいろなことが思い起こされることがあります。もちろん儀礼的に形だけの勤行ごんぎょうで終わってしまう時もあります。でも同じお勤めをしていても、そのひと言が突き刺さる日もありますよね。不思議じゃないですか。自分が読んでいるのだけれども、向こうから言葉が私をつかんでくる日があります。その意味で聞名なのですけれども、称名抜きに聞名はないのです。「南無阿弥陀仏」と称えることがなかったら、聞名にはならないのです。

生きてはたらく念仏

もつと言うと、誰が称えた念仏でも、自分にはたらくということがあります。うちに来ておられたお同行どうぎょうがおっしゃっていました。東京で所帯を持った息子夫婦が、お盆に帰ってきたという話を、七十五歳ぐらいのおじいちゃんがしてくれました。「うれしいことあつたんです」って言うんですね。「なんですか」と聞いてみましたら、四つになる孫娘が帰ってくるなり、おじいちゃんの手をつかんで、「おじいちゃん、行こう」と言ってお内仏ないぶつに引っぱっていったとい

うんです。そしてチンチーンとお鈴りんを鳴らして、「ナマードブルー」って言った。かわいらしいですね。たぶん東京の家にはお内仏はないんですよ。お鈴もないのでしよう。だから田舎に帰ったらおじいちゃんとかれをしないとその四つの子は思っていたのでしよう。すごいと思いますわ。よっぽどおじいちゃんとお参りしたのが楽しかったのかもしれない。

でもそれがうれしかったと言ったあとに、そのお同行は孫娘の念仏が自分に突き刺さったと言います。「私はあんな素直にナンマンダブツと言ったことあるだろうか」とおっしゃるのです。その孫娘さんは、「ナマードブルー」って言うているだけです。でも自分の念仏は朝起きて、「今日も一日無事でありますように、ナンマンダブツ」。もちろん悪いわけじゃないですよ。あるいは夕方もお勤めして、「今日も一日みんな無事でよかったです、ありがとうございます、ナンマンダブツ」。これは感謝の念仏と言ったらそうかもしれないですが、そのかたは「結局、阿弥陀さんと取引しとったんじゃないか」とおっしゃられた。

つまりいま平穩無事に過ごしているから、「ナンマンダブツありがたい」と言っておりますが、もし思わぬことが起きたら、「こんなにお参りしてきたわしが、なぜこんな目に会うんか。神も仏もあるものか」と言ったに違いないと、こういう話をしてくれたのです。それをそのおじいちゃんに呼び起こしたのは、孫娘の「ナマードブルー」というほんとうにたったひと言なのです。

だから誰が称えた念仏が程度が高いとか低いとか、一切ないので。南無阿弥陀仏は他人が称えた念仏でも自分に聞こえてくることがある。隣の人の念仏ではとさせられることもあります。「ああ私、南無阿弥陀仏を忘れておったなあ」と、どきつとさせられることもあります。私はその呼びかけを聞くというところに、南無阿弥陀仏が生きてはたらくわけであります。だから「阿弥陀仏に南無せよ」と呼びかけられて、「ああそうだったなあ」といただき続けていく。これが親鸞聖人が立たれた南無阿弥陀仏のいちどう一道だったと思います。

ともどもに念仏申す

しかしこれらを知らされたからといって、私たちの量るところが消えてなくなるわけではありません。もうこれは身につけていますからね。勝ったか負けたか、得か損か、あるいは敵か味方かって、全部量っています。だからこそ南無阿弥陀仏が要るのです。差別もしない、分け隔てもしないというところになつてしまえるのだったら、もう南無阿弥陀仏は要りません。ところが毎日毎日、この阿弥陀の世界を忘れ続ける私、自分の物差しで量り続ける私なんです。だ

からこそ南無阿弥陀仏をいただいて、量れない世界を知らしていただくことが要るのですね。

法然上人はご自身のことを、「愚癡ぐちの法然坊」とおっしゃいました。親鸞聖人はご自身のことを「愚禿ぐとく釋親鸞」とおっしゃった。愚かということをおっしゃるのです。愚かというのもこれは、人とくらべて賢いか愚かかという話ではありません。そうではなくて、一生懸命に生きているつもりでも、けっきょく自分中心のものの見方に振り回され、自分の好き嫌いを最優先させてしまう。そして人との間に壁を作っていく。そういう愚かさです。でもその愚かな私だからこそ、南無阿弥陀仏を称える道がある。称えて阿弥陀の世界を思い出し続けていく生き方がある。お二人はここに立たれたわけです。

法然上人は、猿が木の枝から木の枝に飛び移るようなもので、今こっちにいたと思ったら次の瞬間には向こうの枝にいるという、こういう譬えを残しておられます。今仏法のことを考えていたと思ったら、次の瞬間には勝った負けた、

得か損かに気をとられてしまう。今ここで腹を立てておられるかたはなさそうですね、これもご縁ですよ。私が五時になっても六時になっても話をやめなかつたら、「一楽いつまでしゃべってるつもりや」って腹を立てられますよね。腹が立つということも、ご縁ですよ。

今、阿弥陀の世界の話を聞いて、「ああそうやなあ、その世界いただいていかないといかなあ」と思っても、お寺の門を出るあたりでもうどこかにいてしまいますよね。まあ家までは持って帰れないと思います。でもそういう私だからこそ、南無阿弥陀仏が要るのです。だからお寺の本堂だけで南無阿弥陀仏じゃないのです。日常生活が南無阿弥陀仏の中に営まれていくということが大事なのです。

法然上人はお念仏を一日六万回称えておられたそうです。最晩年には七万回になったそうです。すごいですね。一秒に一遍称えても、二十時間近くかかります。これはずっと称え通しだったということ。それは裏をかえせばすぐにしゃったわけです。

に阿弥陀の世界を忘れる愚かな私だということを、法然上人はよく知っておられたからです。親鸞聖人はそのお姿を見ておられるわけですから、念仏申して生きて、阿弥陀に導かれて生きていくことを、いちばん大事なこととしておっしゃったわけです。

しかし親鸞聖人は念仏の回数はどこにもおっしゃっていません。なぜかというと、法然上人のお弟子の中には、回数にこだわった人がいるんですよ。法然上人が七万遍称えられているのを見て、「あそこまでは無理だけれども、三万回ぐらいはがんばろう」となったら、次になにが起きるかわかりますよね。「一万回のおまえよりは上だ」とやるのです。南無阿弥陀仏というのは上か下かとからべる必要のない世界をいただいていく教えなのに、南無阿弥陀仏ですら人を裁いたり、上下を言っていく材料にしてしまう。それぐらい人間のとらわれ、思いこみというのはやっかいなのです。

だから南無阿弥陀仏と口で言っている、ほんとうに阿弥陀の世界を大事に

しているかどうかは別問題です。でも別問題だからといって、「じゃあやめておこう」というわけにはいきません。「ほんとうの念仏ができるまで、私は念仏申すのはやめましょう」といったら、いつまでたつてもできないままです。

私は学生時代にいろんな先生から、「わかってもらわなくても念仏申してください」。そして「念仏に育てられてください」と言われて、いつも抵抗していました。私はその時に、「わからないのに念仏して意味があるのか」と思っていました。でも今、同じことを学生に言っています。なぜかといったら、わからない人間でも称えれば、必ず問いが生まれます。「こんなこと言ったら、わかるんだろうか」とか、「南無阿弥陀仏ってどんな意味がこめられてるんだろうか」とか。称えないところにはそういう問いも出てこないのですね。だから先生から言われていて自分は嫌だと思っていたこと、反発していたことと同じことを学生に言っています。

心を清らかにしてから念仏する、そんなことは間に合いません。雑念を払っ

てから念仏する、そんなことも間に合いません。雑念があるからこそ南無阿弥陀仏を申して、なにが大事であるのか、阿弥陀の世界をいただきなおしていく、教えられていくことが起きるわけです。

親鸞聖人はまさにそういう生き方をなされたかただと思います。有名な『歎異抄』第六章の、

親鸞は弟子一人ももたずそうろう。

(聖典・六二八頁)

というお言葉があります。親鸞聖人のことを先生と仰いでいる人はいっぱいだと思います。それに対して、「わしは弟子なんか取った覚えはない。みんな去れ」と言っているのではないですよ。私は先生として、あるいは師匠としてあなたたちとつきあっていません」ということです。「共に同じナンマンダブツに導かれる凡夫ぼんぶです、愚かな凡夫です」というのが親鸞聖人の立ち位置

なのです。

だから親鸞聖人は高いところにはおられません。私たちが日頃見向きもしないような地べたにおられるのです。私たちは昇ろう昇ろうとして、「落ちたら終わりや」と思っています。親鸞聖人はこの大地のところ、地べたのところ、にいらっしゃると思います。ですから「弟子一人ももたず」とおっしゃり、ともどもに念仏申して生きるということを大事になさったかたであります。

私にとっての親鸞聖人

もうひとつすごいと思うのは、親鸞聖人のお手紙の中には、弾圧する者に対して「あわれみをなし」という言葉も出てまいります。親鸞聖人は三十五歳の時に国の権力によって流罪にあわれたかたであります。しかしその弾圧する人をあわれみなさいと言っているのです。どういふことかといったら、弾圧する人には弾圧する理由があるとおっしゃるのです。例えば引つ立てにきたお役人は役目でやっているだけかもしれない。念仏者を憎いと思つて来ているわけ

じゃない。そういう人もいたでしょう。お役目でやらないといけない人もいるわけです。あるいは弾圧を命令した人は念仏の大事さがわかっていない。阿弥陀の世界なんてなくてもいいと思っているから弾圧するのです。だからその人たちにも阿弥陀の世界の大事さが伝わるように、先にご縁をいただいた者は弾圧する者をあわれんで、彼らにも念仏が届くようにということを手紙に書いていかれるのです。

親鸞聖人は、自分がたまたま念仏に出遇えたという思いが強かったからだと思います。例えば自分が努力して念仏に出遇ったとするなら、まだ出遇ってない人を見たら、「あいつは努力が足りない」と言うでしょうね。あるいは自分には勤が鋭く利口で理知に富んでいるから出遇えたと思うなら、「あいつには才能がない」と言うかもしれません。でもそうじゃないのです。聖徳太子や法然上人のおかげで出遇えた。それはたまたまとしか言えない。こういう思いが強いです。だからまだ出遇っておられない人は、今から出遇うご縁が整うこと

が大事なんですね。

もっと言えば批判を加える人も弾圧をする人も、阿弥陀さんは除外なさらない。阿弥陀の世界はどんな者も迎え取るのです。まだその出遇うご縁が整っておられない、熟しておられないですから、先にご縁をいただいた者は、弾圧する人もあわれんで念仏を勧めていきましょうと、親鸞聖人はこういう一生を送られました。

親鸞聖人は六十歳を過ぎてから京都に帰られて、弟さんのところや知りあいのところで、間借りの生活です。八十歳を過ぎたころには火事にあって、今まであった本やメモも燃えた。こんな苦勞にもあっておられます。でも九十歳で亡くなられるその最後の最後まで、出遇うことのできたこの念仏の大事さ、阿弥陀の世界である浄土の大切さ、これをなんとか未来に残していきたい。こういう思いを持ってお仕事をなされたかたであります。

そのお仕事をほんとうに受け取った時に、「親鸞聖人は私にとって宗祖です」

と言えるのだと思います。またその誕生をありがたいと、「宗祖がいなかったら、私はどうなっていたか」と言えると思います。

もうひとつ立教開宗ということでは、八百年前に親鸞聖人が『教行信証』をお書きになって、浄土真宗を顕かにしてくださいましたけれども、それで終わった話ではないですよ。みなさんおひとりおひとりの上に真宗ということが開かれてくる。これがなかったら親鸞聖人がせっかく残されたお仕事は徒労に終わってしまいます。受け取る人がいるからこそ、親鸞聖人はそれをお喜びになると思います。だからその意味で立教開宗というのは八百年前の話ではなくて、それを受け継いでいく人、その教えに領く人の上に真宗が開かれることだと、私はいただいていることでもあります。

まあ私はまだ親鸞聖人の夢も見たことがないような人間ですから、あんまりえらそうなことは言えないのですけれども。しかし親鸞聖人のお仕事を思う時に、これは人類にとって、勝ったか負けたか、役に立つか立たないかということ

とを超えた世界、阿弥陀の世界をいただいでいくという大事なことを残してくださったということを、思っておることです。

最後に南無阿弥陀仏を十遍ほど、ここは大きな声で言ってもだいじょうぶでしょう。地下鉄の駅で大声で言う必要はないですから、ここでは大声と一緒にお念仏をいただきたいと思えます。合掌をお願いします。お念仏をいただきます。

ナンマンダブツ、ナンマンダブツ、ナンマンダブツ……

あとがき

慶讃法要準備委員会委員長 山雄竜麿

「慶讃法要」をお迎えするにあたって、私の正直な思いを吐露することをどうぞお許しください。

実は「宗祖親鸞聖人御誕生八百五十年・立教開宗八百年慶讃法要」を今ひとつ受け止めかねていました。そもそも、御誕生何周年の仏事とはあまり聞いたことがありません。また「どこまでも法然上人のお弟子であった」親鸞聖人の上に、「立教開宗」という言葉は成り立つのでしょうか。幸いにも、このような私の疑問をも、丁寧に解き明かしてくださったのが今回の一楽真先生の記念講演でありました。

まず先生は、「私ではなく親鸞聖人が、出遇われた方々をどのように慶讃なさったかを基準に置きたい」とお話を始められます。



大阪教区慶讃法要お待ち受け大会での一楽真氏の記念講演の映像はこちらでご覧いただけます。



この一言で、大きな誤りを糺ただされた気持ちです。思えば「慶讃法要」の冒頭には「宗祖親鸞聖人」という言葉があります。しかし、私は、私を基準においた宗祖ばかりをたずね、親鸞聖人ご自身が法然上人との出遇いで見出された「むなしく過ぎる人生を越えることができた」という歩みをたずねてきたでしょうか。

もちろん法然上人との出遇いとは浄土真宗との出遇いそのものです。これを一楽先生は「私たちがどう生きていくことがはっきりした」と示されます。

そして、この「むなしく過ぎる人生を越える」生き方を伝えんがために、つまり「法然上人が開かれた浄土真宗がありとあらゆる人に届くように」とご苦労なされ「親鸞聖人は、『教行信証』を執筆されます。

最後に、一楽先生は、八百年の時を超え「教えに領く人の上に真宗が開かれること」を「立教開宗」だと押さえられます。

なるほど、今、パンデミックのみならず戦争が起こるというこの混沌とした世において、「私の宗祖である親鸞聖人が人として生まれ、私の前に道を示してくださっていることを『よろこびて、ほめたてまつる』仏事」がお勤めされるのです。まさしく時節到来でありました。

もちろんこれは私の受け止めではありません。どうぞ、多くの方が本誌をご味読いただき、それぞれの慶讃法要のお待ち受けとされんことを心から念じあげます。

末筆になりましたが、大学長という激務の中ご出向賜りました一楽真先生に深くお礼申し上げますとともに、関係各位に深く感謝申し上げます。

合 掌



一楽 真 (いちらくまこと)

1957年、石川県生まれ。現在、大谷大学学長。
真宗大谷派小松教区宗円寺住職。

著書

『釈尊の呼びかけを聞く 阿弥陀経入門』（東本願寺出版）

『親鸞聖人に学ぶ 真宗入門』（東本願寺出版）

『この世を生きる念仏の教え』（東本願寺出版）

『親鸞の教化－和語聖教の世界－』（東本願寺出版）

『日本人のこころの言葉 蓮如』（創元社）

『大無量寿経講義－尊者阿難、座より起ち－』（文栄堂）

『四十八願概説－法蔵菩薩の願いに聞く－』（文栄堂）

他多数

よろこびて、ほめたてまつる

慶讃法要をお迎えするにあたって

2023年3月1日 初版

講述：一楽 真

編集：大阪教区慶讃法要準備委員会

発行：大阪教区教化委員会 広報・出版部

発行人：禿 信敬

発行所：真宗大谷派大阪教務所

大阪市中央区久太郎町 4-1-11 (〒541-0056)

Tel 06-6251-4720 Fax 06-6251-4796

Email osaka@higashihonganji.or.jp



大阪教区
出版物のご紹介

装幀・組版：澤田 見